

Aoyama Sapience

第43号



青山学院大学 文学部 英米文学科同窓会 会報

2020年7月15日発行

■ 巻頭随想 ■

疫病と世界史

阪本 浩

新型コロナウイルスの影響で混乱が続く中、マンゾーニ、デフォー、カミュなど、感染症流行を背景とした小説がよく売れているとか。文学ばかりでなく、歴史についても疫病の影響が見直されることになるかもしれません。

古代ローマ帝国でも、疫病の大流行がありました。1回目は、2世紀後半のマルクス・アウレリウス治世で、パルティア遠征に従軍した兵士たちが持ち帰り、人口の3分の1が失われたと言われています。細菌の存在など知られていない時代ですが、医学はある程度発達していました。最高の名医と言われたガレノスは、すぐにローマを逃げ出して、田舎の所領に難を逃れたとか。当時の医学ではお手上げ状態だったわけです。帝国の全盛期、いわゆる五賢帝時代はそのマルクス治世で終わります。

2回目の大流行は3世紀後半、ウァレリアヌス治世に見られます。この皇帝も東方に遠征し、ササン朝ペルシアと戦うのですが、軍内に疫病が広

まったために戦力が低下し、皇帝自身が捕虜となりました。ササン朝はこの歴史的な大勝利を岩面に浮彫にして記念しています。ローマ側にすれば、史上初の屈辱であり、「3世紀の危機」、帝国の衰退を象徴する出来事でした。

その間、国内では疫病が猛威を振るい、名医ガレノスの例でも分かるように、病人は打ち捨てられ、人々はこれまでの学問、思想、そして宗教が無力と感じ始めています。そのような絶望的な状況の中でも輝いていた集団がありました。しばしば迫害されていたキリスト教徒です。エウセビオスの『教会史』には、アレクサンドリア司教ディオニュシウスの書簡が引用されています。「…とにかく、わたしたちの兄弟の大半は、あふれんばかりの愛と兄弟愛から、骨惜しみせず互いのことを思いやりました。彼らは危険を顧みずに病人を訪れ、優しく介護し、キリストにあって仕え、そして彼らとともに喜びのうちにこの世を去り



した…決して殉教に劣るものではないように思われました」(秦剛平訳、講談社学術文庫より)。今日の医学からみれば不適切な行為でしょうが、当時の人々には、愛と奉仕の精神を持った集団による奇跡の業と映ったようです。度重なる迫害にも拘らず、この後、キリスト教徒の数は急速に増大していきます。ローマ帝国の衰退とキリスト教の興隆という世界史的出来事の背景に、疫病の流行があったと言えるかもしれません。

新型コロナウイルス感染拡大で世界のあり方は大きく変わるだろうと言われています。世界史的出来事を経験しているのかもしれませんが。「地の塩、世の光」をスクール・モットーとする青山学院大学はどこに向かうのでしょうか？

(青山学院大学学長 史学科 '78年卒)

シェイクスピアから愛の花束を(5)

"The course of true love never did run smooth."

(大意:まことの恋がなめらかに実を結んだためしはない。)

喜劇『夏の夜の夢』のヒロイン、ハーミアは恋人ライサンダーとの交際を父親に禁じられ、意に染まぬ男性との結婚を強要されます。さまざまな障がい乗り越えて、恋人たちが結ばれる過程を面白おかしく描くのは喜劇の定石でもあります。

自分たちの恋を許してもらえずに落ち込む二人は、真実の恋が実る

には多難な道のりがある、となくさめあいます。今回の引用句を語るにはライサンダーですが、進退きわまった窮状に、まるで他人事のような口ぶりが笑えます。客観的に自分たちの姿を眺めているような、あつけらんとした態度から、喜劇の笑いが生まれるのでしょうか。

この作品は1595~96年に書かれたと推定されます。同じシーズンに書かれたのが禁断の恋という基本的な設定を共有する『ロミオとジュリエット』です。恋愛悲劇の典型といえる芝居を書いた同じ年に、似

たテーマで喜劇も作り分けたというわけです。劇作にかけては天才的な職人だったシェイクスピアの面目躍如といえます。

ところで、シェイクスピア本人は18歳の時に8歳年上のアン・ハサウェイと結婚しています。周囲の反対が相当あった可能性も否定できません。450年近くも前のこと、ウィリアムとアンが何を思っていたのか、その真相は不明です。しかし結婚にいたるまで二人にはかなりの葛藤があったのでは、そしてその実体験が劇作に活かされたのでは、とゆかいな空想の翼を広げてみたくありませんね。

佐久間康夫

比較芸術学科教授
('82年院修了)